

## *The Robber Bride* にみるカナダ人のアイデンティティと フェミニズム

薬 師 英 子\*

### Canadian Identity and Feminism in Margaret Atwood's *The Robber Bride*

Eiko YAKUSHI\*

#### Abstract

The following study examines Canadian identity and feminism in Margaret Atwood's *The Robber Bride*. In the novel the four main women characters undergo divided or multiple personality. They have all faced complicated childhood and have difficulty defining their identity. By confronting their worst enemy, Zenia, three women, Tony, Charis and Roz, find their true self. Their struggle to finding out their own identity represents the same predicament that many Canadians have for living in a country of multi culture. Their multiple personality also represents the struggle of women who fight for their survival in paternal society. The story also asserts the idea of feminism by referring the Grimm fairy-tale *The Robber Bridegroom*. The story reverses the role of male and female characters to evoke the difference of male and female idea in our society. I would like to look into the significance of the fairy-tale *The Robber Bridegroom* and how the context of the original fairy-tale is relative to Atwood's *The Robber Bride*.

#### 序論

Margaret Atwood (1939-) の *The Robber Bride* (1993) は現代のカナダ、オンタリオ州にあるトロントを舞台とし、同じ大学に通った四人の女性たちの姿を描いた物語である<sup>1</sup>。大学時代を同じ寮で過ごした、Tony, Charis, Roz の三人の女性は1960年代から80年代にかけ、彼女たちの弱みと善意に付け込み、唯一の理解者であ

るかのように振る舞う Zenia に夫や恋人を奪われる。その後、ズィーニアの弁護士であると名乗る男から彼女の謎の死を逃げられた三人は、それぞれの過去とトラウマを封印したまま日々を過ごす。しかし、死んだと思っていたはずのズィーニアが再び三人の前に現れることで、彼女たちは自分のトラウマと向き合うことになる。この作品にはカナダ人作家としてのアトウッ

---

\*人文学部

1 Margaret Atwood. *The Robber Bride*, Anchor Books, 1993.

ドの他の作品にも共通するテーマである「サバイバル」が、魔性の女ズイーニアと対峙する三人の女性の姿を通して描かれている。アトウッドの作品に描かれる「サバイバル」はカナダ人のアイデンティティの象徴であると同時に、男性中心の社会で常に「生き残り」をかけて戦う女性たちの葛藤を描写している<sup>2</sup>。

本稿では、登場人物である四人の女性たちに共通する二重人格、または多重人格という「サバイバル」の比喩的表現に注目し、作品に描かれるカナダ人のアイデンティティを検証していく<sup>3</sup>。また、四人の登場人物一人一人の生い立ちや人格を考察し、そこに示唆されるアトウッドのフェミニズム的観点を読み解いていきたい。次に、*The Robber Bride* のタイトルの由来となっているグリム童話 *The Robber Bridegroom* の物語構成や登場人物の役割や特性を考察し、二つの作品の関連性を検証する。

## I カナダ人のアイデンティティとフェミニズム

### 1-1：登場人物の二面性にみるカナダ人のアイデンティティとフェミニズム

マーガレット・アトウッドの *The Robber Bride* (1993) に描かれる登場人物の女性たちは、アトウッドの初期の作品 *The Edible Woman* (1969)、*Lady Oracle* (1976)、*Cat's Eye* (1988) と同様に幼少期の経験や父権社会の抑制からトラウマを抱え、そこから生じる精神不安から二重人格、または多重人格的な要素を持っている。いずれ

の作品も、登場する女性たちが本来の自分とは異なる新たな人格を作り上げ、現実から逃避し、自らの過去や人間関係を偽ることで不安や恐怖から目を背けようとする姿が描かれている。『寝盗る女』で登場する三人の女性トニー、カリス、ロズも例外ではない。彼女たちの心には幼少期の体験がトラウマとなり、それぞれ心に自分の闇や恐怖を担う分身が存在する。彼女たちの分身は自己を保つための防衛対策とし生まれ、それは彼女たちが過酷な現実で「生き残り」ために必要不可欠な存在である。しかし、彼女たちは自分の中に存在する闇でもあり、対照的なもう一人の自分の存在を肯定することができない。登場人物の女性たちは、目を背けていた現実を受け入れ、自分の中にみる二面性に「自分が何者であるか」という問いを抱くことで真の自己像を見出そうと葛藤する。アトウッドは自らのアイデンティティを摸索する登場人物たちの葛藤と、さまざまな人種と文化を抱える多文化国家のなかで、集団としてのアイデンティティと一個人としてのアイデンティティとの間に揺れるカナダ人との葛藤を重ねている。『寝盗る女』に登場する三人の女性たちはカナダに生まれ、カナダ人として育ちながらも、異国の地を故郷とする移住民を親として育ち、彼女たちにとってカナダは故郷と呼ぶことのできない見知らぬ土地でしかない<sup>4</sup>。幼少期に、時に彼女たちの親からも、周囲の者たちからも部外者であるような扱いをうける彼女たちは自分の原点を知らないまま成長する。

2 アトウッドは、カナダ文学では人も動物も犠牲者として描かれ、その基本となる姿勢は「必死にしがみつकिながら生存し続けること」と著書『サバイバル』で語っている。また、鷺見は『…九〇年代の戦争の世紀を生きのびた女たちの視点から歴史を検証する『寝盗る女』において、女（性）はいかに個人的、政治・社会的危機状況から脱して「生き残り」ことができるか、その過程が克明に語られて』p.114いと指摘している。

3 Atwood's representation of Canadian identity in *The Robber Bride* reformulates a recurring trope in her fiction, that of divided or multiple identity, and thus poses a challenge to the idea of a cohesive or authentic version of Canadianness. This article offers an extended consideration of these issues, and examines the role of storytelling in the formation or construction of the Anglo-Canadian identities invoked in the novel. "As Canadian as possible under the circumstances": how girls grow up Canadian in Margaret Atwood's *The Robber Bride*, p. 162

彼女たちに「自分が何者であるか」「どこから来たのか」という問いを迫る二重人格、または多重人格という人間の多面性はカナダ人の葛藤とアイデンティティを示唆している。それと同時に、男性主体の社会体制の中で女性として「生き残り」、男性主観のおしきせの女性像と真の自己像との間で揺れる女性としてのアイデンティティ確立の葛藤を描いている<sup>5</sup>。

## 1-2: ズイーニアにみるカナダ人のアイデンティティとフェミニズム

『寝盗る女』の中心的人物であるズイーニアは登場する四人の女性の中で唯一語りを持たず、謎の多い亡霊のような存在として描かれている。作品の中で物語を語るのは歴史家のトニー、雑貨屋の店員カリス、自らの会社の社長を務めるロズの三人の女性である。彼女たちは、大学時代に同じ寮であったこと以外、考えも性格も仕事も全く異なる三人の女性である。彼女たちが卒業後20年たっても月に一度昼食会を持つのは、彼女たちにはズイーニアという共通の災難を経験した被害者意識があるからである。ズイーニアの最初の犠牲者となるのはトニーである。学生であった60年代、トニーを言いくめ自分のレポートを書かせたズイーニアは、後にそのことをもとにトニーを脅迫し1,000ドルを巻き上げ、恋人であったウェストを残して失踪する。

トニーは傷心のウェストを介抱し、後に彼と結婚するが、再び二人の前に現れたズイーニアは元恋人のウェストをトニーから奪い返し、すぐにあきると紙くず同然に彼を捨てる。70年代、ズイーニアは末期の癌を偽り、当時ヨガのインストラクターであったカリスのもとに居候として転がり込む。やがてカリスが同棲中の恋人ビリーの子を妊娠し、自分が居候として留まることができなくなることがわかると、身重のカリスを残し、カリスの恋人ビリーと姿をくらます。80年代、自分の過ちを悔い改め新しい人間に生まれ変わったように振舞うズイーニアはロズに取り込み、職を紹介してもらう。その恩をあだて返すかのように、ズイーニアはロズの夫ミッチを奪い、同棲するが、ミッチを残し再び失踪する。ズイーニアを失い、ロズにも見放されたミッチは酒に依存するようになり、ヨットで航海中に転落し溺死する。

60年代から80年代にかけてのズイーニアの行動はトニー、カリス、ロズ、三人の語りによって明らかになるが、性格も出生も、時に容貌も変わるズイーニアの実体はつかめない。ズイーニアは三人の女性たちの複数の視点から描写されることによって、その多面性がより強調されている。また、ズイーニア自身の語りがなく、その実体がまったく不透明であることも彼女がより象徴的な存在となる効果をもたらしている。

4 カナダの文化的特徴は、アメリカが「フロンティア精神」、イギリスが「島」ということに対して、「生き残ること」(サバイバル)であるとアトウッドは定義する。それは厳しい気候風土のなかで、文字どおり肉体的に生き残ることが第一条件であるというカナダ人の共通意識を示している。だが、同じカナダ人でも、祖国へ帰りきれぬ絶望感と「悪意にみちた北部」ともいべき新天地への恐怖をバネに生き残ろうとする移住民と、この地を故郷として営々と生き残ってきたカナダ先住民(イヌイットやカナダインディアン)との間の意識のギャップをこの国は抱えている。

カナダは「カナダ人」自身にとっても見知らぬ領土である。移民には、文字どおり見知らぬ土地であり、先住民には、「南の人間」の見知らぬ文化に飲み込まれ異様な土地になり果てた。つまり、「ここはどこなのか」と「私は誰なのか」の質問に、同様に答えが出しにくい状態が続いてきたのである。『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』、彩流社、2008年、p. 111。

5 女性であるがゆえに歴史的に釈迦の中で他者として疎外されてきた者が抱く自己像とお仕着せのアイデンティティとの不一致感覚、あるいは植民地であったがために宗主国に押し付けられたアイデンティティと自分たちの経験に基づくカナダ人としての自画像との乖離、もしくはケベックとともに二重性を生きなければならないカナダのアイデンティティの問題などが共振している。『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』、p. 94。

大胆不敵で支配的、自由奔放でいて権力主義でもあるズイーニアは誰よりも強い個性を持っているように思えるが、四人の登場人物の中で最も自己分裂が顕著な人物である。彼女は話をする相手によって人格を変え、時には「ロシアの伯爵夫人の娘」で母親に幼いころから売春をさせられていた被害者であり、ナチスの魔の手から家族で唯一免れたユダヤ人「戦争孤児」であり、故郷をもたない「ジブシーの娘」であり、聖職者から性的虐待を受けた犠牲者であると訴える。自分の故郷を知らず、居場所を持たないズイーニアは常に周囲からよそ者として敬遠される。ズイーニアは部外者として孤立し、社会の犠牲者であることを逆手にとり、相手の弱みや善意に取り入って他人の家に寄生する。侵略者となるズイーニアは略奪を繰り返し、一時的には勝者となる一方、孤立を深め、やがては社会から切り離された犠牲者となる。

社会から部外者として扱われ、異郷生活をしている亡命者のような生き方をするズイーニアは北欧からカナダに渡ってきたカナダの白人系移住民を暗示している。彼らが異国から来たよそ者であると同時に、必然的に侵略者という存在になる姿もまたズイーニアと共通している<sup>6</sup>。

「自分がどこから来て、何者であるのか」と問い自己像を持っていないズイーニアはカナダ人のアイデンティティを象徴している。

また、ズイーニアが相手によって自分の生い立ちを変える行為は、他者から期待されているズイーニア像を演じようとする意識からでもある。それは男性主体の社会で、女性が期待されているあるべき姿でなくてはならないとする、

押し付けのアイデンティティに応える女性の葛藤を表している。

### 1-3 : Tony, Charis, Roz

戦史を専門とする歴史家であるトニーは、物語の序章と最終章を語る役割を担っている。歴史とは過去に起こった決定的な事実、真実を記録したものとして、一般的にはどちらのサイドもとらず、客観的に語られるものであるという概念がある。歴史家であるトニーが作品の冒頭と終盤を担当し、ズイーニアと関わる三人の女性がそれぞれの個人的物語を語ることで、この作品には常に客観性と主観性という対照的な二つの要素が存在している<sup>7</sup>。トニーは作品の中で「終わりはすべて恣意的である」(465)とする一方で、トニー・カリス・ロズの三人で行ったズイーニアの葬儀を戦没者追悼記念日である11月11日に選んでいる。公に定められた歴史的な日を選ぶことで、三人の女性とズイーニアとの間に起きた出来事が事実であったとして現実を受け入れる姿と、ズイーニアもまた彼女たちと同じように男性社会で戦ってきた戦友であり、名も無き犠牲者の一人であることを暗示している。

## II グリム童話 *The Robber Bridegroom* との関連性

### 2-1 : *The Robber Bridegroom*

アトウッドの *The Robber Bride* はその題名通り、グリム童話 *The Robber Bridegroom* に起因している。ストーリーの枠組みとなっているグリム童話の『泥棒花婿』では、人食いの一

6 Howells は “The Robber Bride ; or, Who Is a True Canadian ?” でズイーニアは常に “outside and on the loose, an exile and an invader.” であり、これはアトウッドがカナダの移住民を定義する要素と同義であると指摘している。p. 92

7 トニーは戦史を専門とする歴史学者であり、物語の序文にあたる「はじまり」(Onset) と終章にあたる「おわり」(Outcome) の語り手の役割を担ってきた。その枠組みからは、ズイーニアと三人の人物たち (トニー、カリス、ロズ) の個人的物語 (過去の記憶) はすなわち歴史的出来事でもあるという認識が読みとれる。歴史は公的・普遍的／物語は私的・恣意的という〈常識〉をひっくりかえす試みが透けて見える。P. 266

団が人々の目を欺き、若く美しい女性を花嫁として迎え入れる。彼らの次の花嫁として迎え入れられるはずの娘は花婿不在中に彼らの屋敷を訪れる。すると一人の老婆が現れ、娘に彼らが人食いの一味であることを教え、彼らに見つからないよう隠れることを諭す。そこに別の花嫁を連れ、一団が戻ってくる。老婆の忠告通り身を潜めていた娘は、彼らが連れてきた花嫁を切り刻み食べる光景を目の当たりにする。娘は老婆とともに屋敷から脱け出し、結婚式当日を迎える。結婚式では出席者一人一人が物語を語る風習があり、そこで娘は自分が花婿の屋敷で見た光景を話す。花婿とその一味は捕らえられ、処刑される。

*The Robber Bride* はその構想やテーマ、登場人物の特性をグリム童話の『泥棒花婿』を基とし、登場人物の性を逆転させることでフェミニズム的概念を強調している。加害者である人食いの男性はズイーニアに置き換えられ、彼女はトニー、カリス、ロズ三人の女性たちの夫や恋人である男性たちの命を文字通り、もしくは象徴的に奪っていく。アトウッドはグリム童話の登場人物の性を逆転させて語りなおすことで、長い間人々の深層意識を支配してきた文化的神話を崩そうとしている。典型的な文化的神話の中で、女性は無垢な処女や意地悪な継母、恐ろしい人食い魔女として描かれ、対する男性は勇敢な王子、威厳のある王様や父親として社会の正義や模範を示す英雄的存在として描かれている。アトウッドは男性中心社会の中で男性によって作り上げられてきた男女のイメージと対照的な世界を描くことで、人々の固定概念を覆そうと試みている。

## 2-2：物語の構成

『寝盗る女』は死んでいたはずのズイーニアが再びトニー、カリス、ロズの前に現れる三人

の女性にとって決定的な場面となる現在から始まり、それに続き、トニー、カリス、ロズそれぞれの回想が語られる。三人のズイーニアの回想は60年代から80年代へと順に語られ、最後は再び現在に戻り、トニーの語りで物語は終わる。作品全体は大きく分けて三部に分けられている。作品の第一部は「トクシク」と題され、死んだはずのズイーニアが三人の前に現れる現在の語りで、一人あたり五章ずつの配分で構成されている。続く第二部は、「黒いエナメル」、「私たちの夜」、「泥棒花嫁」と題され、トニー、カリス、ロズの順にそれぞれ等分に11章ずつ、ズイーニアとの過去が語られる。第三部は第一部と同じ「トクシク」と題され、現在へと場面が戻る。再びトニー、カリス、ロズの順に現在でのズイーニアとの対峙を語り終えると、三人はズイーニアの死を同時に目撃し、最後はトニーの語りで物語は閉じる。この構成は、おとぎ話の定石である三度の繰り返しを模倣する物語構成になっている。

## 2-3：固定概念との相似

『寝盗る女』の中で自分の夫、恋人をズイーニアに奪われたトニー、ロズ、カリスの三人の女性たちは、深く傷付き、周囲の社会をほぼ遮断し、ただなすすべもなく家の中に引きこもってしまう。彼女たちはその不幸が不可抗力であったかのように受け止め、彼女たち自身で夫や恋人を取り戻そうとするわけでもなく、ただその災難が過ぎ相手が戻ってくるのを待つ。ズイーニアという圧倒的な支配力の持ち主を前に、彼女たちは無防備で無力な存在でしかない。突然降りかかった不当な暴力（搾取・支配・権力）に無抵抗で受動的な彼女たちの姿勢には、強い被害者意識がうかがえる。また、彼女たちが被害者であり、ズイーニアがグリム童話の『泥棒花婿』の「泥棒」であるとするので、彼女

たちの夫や恋人はズイーニアによって盗まれたのであって、彼らもまた被害者であると受け止められる。そこには、彼らが自分たちの本当の意思でズイーニアのもとに行ったのではないと解釈し、自らの傷心を慰めようとする保護的な意図も垣間見える<sup>8</sup>。

女性が受動的な存在として描かれる一方、グリム童話の『泥棒花婿』で難を逃れた娘の役がアトウッドの『寝盗る女』のトニー、ロズ、カリスであるとすれば、前者の構成と後者とが肯定的な面で共通していると考えられる。『泥棒花婿』の主人公である娘は、父が薦める花婿にどこともない違和感を持つ。自分の屋敷に来るよう促し、屋敷までの道に道しるべを残しておく約束する花婿に不信感ぬぐいきれない娘は自分で道しるべとなる豆の種を用意し、それを花婿の屋敷までの道に撒いていく。この気転が幸いし、娘は彼女を救った老婆とともに無事に自分の村にたどり着くことができる。自らの気転で難を逃れた娘はさらに、結婚式当日自分の口から真実を語ることで泥棒花婿とその一味を捕らえることに成功する。さらに、アトウッドの『寝盗る女』では、はじめは無力であった三人の女性たちが、年齢を重ね、互いが互いの命を救う助言をくれた「老婆」になることで、ズイーニアという「泥棒花婿」から逃れることができる。それは、三人の女性ひとりひとりが直接ズイーニアと対面し恐怖や被害者意識と対峙することで、自らの闇を受け入れ、分裂した自己を統一する結果へとつながる。

男性に危害を加える加害者がズイーニアという女性であることが強調される一方、夫や恋人を奪われた三人の女性たちも彼らと同様に犠牲者であり、最終的に悲劇的な最後を迎えるズイーニアもまた犠牲者であることで、例え立場が逆転したとしても女性は何らかの形で犠牲者となることが示唆されている<sup>9</sup>。すべての女性が常に犠牲者の対象であることは、作品の随所に描かれている。アトウッドは作品中でソフォクレスの Andromache (トロイアの英雄ヘクトルに嫁す。トロイア戦争で一族を滅ぼされ、戦利品としてネオプトレモスの妾にされた悲劇の女性)<sup>10</sup> やエウリピデスの *The Trojan Women*、人魚伝承、軍の指揮官として活躍した女性の伝説、聖書からはイザベルと Whore of Babylon の一節が引用されている。男性主体の社会で作られた神話や歴史を描くことで、数世紀も前の女性と今昔も男性中心社会で女性のあり方は変わっていないということを示唆している。それを裏付けるのが、トニーの語りの中でとりわけ歴史的な出来事として位置付けている戦史にある。トニーは1211年5月2日を彼女が歴史的と位置付ける日として選ぶ。その日とは、「異端審問による南フランスの要塞カルカソンヌの陥落に次いで、60日におよぶ抗戦も空しく、ラヴォールが陥落した日である。80人の騎士が斬首、400人が火あぶりの刑、そしてカタリ派のリーダー格ジロード令夫人(マダム・ラヴォール)が井戸に投げ込まれ非業の死を遂げた日(463)」である。

8 Kraege は *Margaret Atwood's The Robber Bride: a Feminist Interpretation of a Fairy Tale* で “robbed” という表現が用いられているのは、三人の女性たちのもとを夫や恋人が去ったのは彼らの選択ではないことを示唆し、そのことが彼女たちを “comfort” する作用ももたらしていると指摘する。p. 8

9 Yet in this novel, one could also say that Roz, Charis and Tony suffer more than their partners..., with everybody getting hurt: the men, their partners, and perhaps the cruel woman, too. The later may also suffer, because her actions show a seriously deranged state of mind. *Margaret Atwood's The Robber Bride: a Feminist Interpretation of a Fairy Tale*

10 That zsenia dies after being thrown from her hotel window into a fountain suggests that options for woman in the twentieth century have changed little. *The Old Maps are Dissolving: Intertextuality and Identity in Atwood's The Robber Bride*

この非業の死を遂げたジロード令夫人と同様、『寝盗る女の』作品終盤、ズィーニアは何者からか追い詰められ、身を潜めていたホテルのバルコニーから転落し、正真正銘の死を迎える。

### Ⅲ 新世代と抵抗する女性たち

#### 3-1：新世代を生きる子どもたち

破天荒で型破りなズィーニアに始まり、男勝りに働くロズ、戦争を専門とするトニーなど典型的な女性像とはかけ離れた女性が描かれている一方、男性は脇役で、象徴的な存在でしかない。彼らは個性も薄く、主要な登場人物の考えを中心に進められる中で少数派の人間でしかなく、見え透いた単純な性格の持ち主で、限りなく平凡な存在として描かれている。

ロズの双子の娘は幼いころから女性であることに負の概念を持たない。それは二人が彼女たちのぬいぐるみや童話の登場人物をすべて女性にみたてる行為から考察できる。彼女たちを取り巻く存在が全て女性であることに、彼女たちの生活する世界が女性中心であることは明白である。双子が女性だけに囲まれた世界を作るのは、そこに守られているという安心感や女性こそが優れているとした偏った概念があるわけではない。それは、トニーが双子にグリム童話 *The Robber Bridegroom* を読み聞かせる場面に表れている。双子は物語の男女の配役をすべて逆転するのではなく、登場人物はすべて女性という彼女たちの信念通り、被害者も女性にする。双子の娘には常に女性は制圧され犠牲者であるという負の概念もなければ、女性が加害者として支配的、暴力的であるという男性社会では異端的な発想に違和感を持たない。一方的な被害者であると否定的に捉えていないことが、彼女たちの母親やそれ以前に生きた女性たちと大きく異なる点といえる。長い間女性を束縛していた社会的神話をいともたやすく崩してしま

うロズの双子の娘たちは、新しい世紀を生きる次世代のホープなのである。(p, 263)

#### 3-2：抵抗する女性たち

ズィーニアは父権的社会で抱かれる女性像とは対照的に描かれている。男性中心社会では、女性は従順で心やさしく穏やかで扱いやすい存在でしかない。また、純潔や花嫁などのイメージから白が似合うことが適切な印象とされている。トニー、ロズ、カリスにはこの要素が備わっている。トニーは、戦争歴史家として女性らしからぬ職業である一方、夫であるウェストに従順で、ズィーニアに捨てられ廃人のようになったウェストを迎え入れ、二度に渡って献身的に支えている。ロズは男性のように会社を取り仕切り、社会の中心的な人物として活躍する一方、家庭を大切にし、子どもを守る強い母性的要素がある。カリスもロズに同様、強い母性的要素を持っている。それに対して、ズィーニアは黒い服を身に着け、支配的で自己主張が強く、権力主義で決して人の思い通りにはならない人物。予測不可能で衝動的。男性中心の父権的社会の持つ女性の典型的なイメージとはまったく対照的。トニーとの出会いの場である「黒いエナメル」の場面においても、アパートすべてを黒で塗りつぶし、その中に一人対立色の白い服を身にまとうズィーニアの姿は社会に抵抗しようとする姿の象徴。

#### 3-3：時代錯誤の象徴

破天荒で型破りなズィーニアに始まり、男勝りに働くロズ、戦争を専門とするトニーなど典型的な女性像とはかけ離れた女性が描かれている一方、男性は脇役で、象徴的な存在でしかない。彼らは個性も薄く、主要な登場人物の考えを中心に進められる中で少数派の人間でしかなく、見え透いた単純な性格の持ち主で、限りな

く平凡な存在として描かれている。

三人の女性の夫、恋人はそれぞれ父権社会の支配的な概念を持っている。女性を見下しているが、最終的にはトニーのもとに戻るウェストを除いて、カリス、ロズの元を去ったビリーとミッチは人生の敗者となる。

ズイーニアの学生時代の恋人であったウェストは、ズイーニアが彼を捨てて姿を消すと自分の力量不足で彼女を路頭に迷わすことになったと強い罪悪感に襲われる。ウェストは女には男の庇護が不可欠であるという男性中心の支配的固定概念を強く信じて疑わない。トニーが二度目となるズイーニアの本当の死を伝えると、彼女を抱きしめて、慰めの言葉をかける。実際にはトニーが作り上げた家（要塞）の三階（塔）に何も知らずにひきこもり、魔女（ズイーニア）からトニーによって守られていたのは自分であることにウェストは気付かない。

カリスの同棲相手であるビリーはベトナム戦争の徴兵を免れるためカナダに逃亡し、平和運動家を通してカリスの家に居候することになる。ビリーは、ベーコンはどこからともなく魔法のように出てくるものと信じている身勝手な男で、性的にも物質的にもカリスを搾取し、最後にはカリスが愛情を注いで育てていた鶏を一羽残らず殺して、ズイーニアと失踪する。後に、カリスはビリーが「カリスが鶏小屋に行つて死骸を見つけたところを想像し、大笑いをしていた」とズイーニアから聞かされる。保護されていたのはビリー。カリスを見下して、姿を消したビリーは三流スパイとしてちっぽけな仕事をし、麻薬が原因で身体はボロボロになり、廃人のようになる。戦争反対も徴兵拒否も見せかけだけの信念だったビリーは、結局は人生の敗者とな

る。そこには大国として絶大な権力を持つアメリカと生き残るための防衛姿勢と受動的なカナダと対照が描かれている。

ロズの夫ミッチは陽のあたる場所しか歩いたことのないエリート。社長の娘であるロズと結婚し安定した富と地位を得たミッチは、新たな開拓地を求める冒険家のように若さや自由を求めて浮気を重ねる。浮気相手に飽きると、家庭を守るために自分が犠牲を払ったかのように振る舞い、ロズの温かい庇護のもと休息時間を過ごす。ミッチは家族を捨ててズイーニアと同棲するが、ズイーニアに見捨てられると再びロズの庇護を求める。ロズにもズイーニアにも見捨てられたミッチは酒に依存するようになり、自らの所有するヨットから転落し溺死する。

「女には男の庇護が必要」であるという男性社会から作られた観点と実際には「男に女の庇護が必要である」というパラドックスが描かれている。

### 3-4：サークル・ゲーム

サークル・ゲームとはアトウッド作品すべてに適底する鍵概念であり、『寝盗る女』の三人の女性にもその傾向がある<sup>11</sup>。気まぐれに始めるこの排他的遊びに夢中になる子どもたちがいつしか自分たちの現実認識を限定していき、都合の悪いものを寄せ付けない守備的精神性を形成していく様を描いている。戸外の子どもたちとシンメトリー関係にあるのは屋内の恋人たち。彼らは見慣れた安全な世界をただ守るため、自分の周囲を囲い、要塞を築き、異質なものを排除しようとひたすら防御の姿勢で生きている。見慣れた安全な世界を作るためだけに、人々は平坦な日々を過ごす。『寝盗る女』のトニー、

11 アトウッドの最初の詩集『サークル・ゲーム』のテーマであり、以降のアトウッド作品すべてに通底する鍵概念である。…サークル・ゲームとは、言い換えれば秩序と概念の比喩であり、混沌や混乱を排除しようとする心理的儀式である。p. 93

ロズ、カリスもまた、平和で安全な日々を愛し、守ろうとする人間であり、彼女たちのような人間にとって、破天荒で無秩序なズイーニアは彼女たちの安全な世界を脅かす存在でしかない。しかし、ズイーニアの存在なくしてトニー、ロズ、カリス三人の女性たちは変わることはできなかった。三人の女性たちは自分たちの最も大切なもの、夫や恋人を失うことで自分の弱さを知り、それを乗り越えることで強さを得る<sup>12</sup>。

## 結論

マーガレット・アトウッドの小説 *Lady Oracle* (1976) が犠牲者のあり方やその意識を変える転換期となる作品であると位置づけるとすれば<sup>13</sup>、*The Robber Bride* はその犠牲者意識にさらに踏み込み、そこに描かれている偽りの自己や二面性がいかに危険で、同時に自己解放につながる鍵になる存在であるかを明示している。アトウッドの *The Robber Bride* 以降の作品にも自己分裂や多面性と葛藤する登場人物の姿が描かれるが、登場人物が不安から解放され、ある種の希望やカナダ人、または一個人としてのアイデンティティを見出すようになるのは『花嫁泥棒』からだと考えられる<sup>14</sup>。

トニー、カリス、ロズは死んだはずのズイーニアと対面し、自らの過去を語ることで深層に隠蔽していたトラウマと向き合い、過去を受け入れる。トラウマを克服した三人は、もはや犠牲者ではなく、女性として、そしてカナダ人と

してのアイデンティティを確立する。

『寝盗る女』において、自己を持たず迷走するズイーニアは戦争、児童虐待、家族崩壊、ガン、売春、麻薬、男女のセクシャリティなど、現代が避けて通れない問題と人間のトラウマを一身に背負った存在である<sup>15</sup>。ズイーニアの存在は累積し、固定観念化してしまっている問題解決を促す現代社会への警鐘であると同時に、二つの対立存在の共存や均衡、調和を訴えている。

## 参考文献

- Bloom, Harold. *Bloom's Modern Critical Views New Edition Margaret Atwood*, Infobase Publishing, 2009.
- Bouson, J. Brooks, "A Feminist and Psychoanalytic Approach in a Women's College", *Approaches to Teaching Atwood's The Handmaid Tale and Other Works*, Ed by Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, Shannon Hengen, The Modern Language Association of America, 2000, pp. 122-127.
- Cooke, Nathalie, *Margaret Atwood A Critical Companion*, Greenwood Press, 2004.
- Donna L. Potts, "The Old Maps Are Dissolving": Intertextuality and Identity in Atwood's *The Robber Bride*, *Tulsa Studies in Women's Literature*, Vol. 18, No. 2, University of Tulsa, 1999, pp. 281-298.

12 They were too lenient with their companions and only became stronger after being abandoned by them. p. 21

13 窪田氏は『レディ・オラクル〜アンチ・ゴシックという名のパロディ〜』のなかでその作品が「それまでのアトウッドの姿勢を継承し、発展させながら、後の作品と大きくつながりをもつことになる新境地を開拓している。」と述べている。作品の主人公を作家と設定することで、それ以前の主人公とは違い主人公が「自分自身について語る〈現実〉や〈実体〉の物語と、彼女が書いている〈非現実〉、〈幻想〉」を認識していることを指摘している。しかし、最終章での主人公の決意は「軽く」「漠然」として、「めざめとは無関係の、成長していない人間の姿」とであると指摘している。P. 151-158

14 鷺見は『寝盗る女〜未来へひらく解体新書〜』のなかで、最終章でトニーがカリスとロズのにぎやかな笑い声のする部屋に続く扉を開けようとする描写は「おとぎ話の扉がつねに新しい世界へとひらく魔法の扉であるように、人類の未来へとひらく象徴的扉」として述べている。p. 267

15 Lorrie Moore は *Every Wife's Nightmare* のなかで、アトウッドはズイーニアを "evil : war, disease, global catastrophe." の象徴として描いていると述べている。

- Howells. Carol Ann, “The Robber Bride ; or, Who Is a True Canadian ?”, *Margaret Atwood's Textual Assassinations -Recent Poetry and Fiction-*, Ed by Sharon R. Wilson, The Ohio State University Press, 2004.
- Kraege. Fiona-Alileen, *Margaret Atwood's The Robber Bride : a Feminist Interpretation of a Fairy Tale*, 2002.
- Margaret. Atwood, *Second Words : Selected Critical Prose*, Anansi, 1982.
- Margaret. Atwood, *Survival The Thematic Guide To Canadian Literature*, House of Anansi, 1972.
- Margaret. Atwood, *The Robber Bride*, Anchor Books, 1993.
- McCarthy. Ellen, “As Canadian as possible under the circumstances” : how girls grow up Canadian in Margaret Atwood's *The Robber Bride*, *Views of Canadian Cultures*, Vol. 3-no. 2, 2005, pp. 160-171.
- Moore. Lorrie, *Every Wife's Nightmare*, The New York Times, October 31, 1993.
- Nischik. Reingard M, *Margaret Atwood Works & Impact*, Camden House, 2000.
- Somacarrera. Pilar, “Power politics : power and identity”, Howells. Coral Ann, *The Cambridge companion to Margaret Atwood*, Cambridge University Press, 2006.
- 伊東節（編）『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』、彩流社、2008
- 佐藤宏子、『英語圏女性作家の描く家族のかたち』、ミネルヴァ書房、2006
- マーガレット・アトウッド、『サバイバル－現代カナダ文学入門－』、加藤祐佳子訳、御茶ノ水書房、1995